

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトに関する若きシュプランガー

Der junge Spranger über Wilhelm von Humboldt.

山 元 有 一

Yuichi Yamamoto

Wir haben nicht immer genug die unmittelbaren und ergründenden Materialien, die zu der folgenden Frage beiträgt, warum Eduard SPRANGER (1882-1963) als Habilitationsthema den Gedanke und die Leistung Wilhelm von HUMBOLDTs (1767-1835) gewählt hat, soweit wir in seinen zurückgeblickten Sätze, z.B. "Meine Studienjahre 1900 bis 1909", die Antwort suchen. Wir müssen aber in den Abhandlungen seines Wanderjahrs eintreten. Wenn wir seinen Gedanken in der Aufsätze wie "Humantät", "Phantasie", und Dissertation, die er in den Studienjahre zu Berlin beschrieb, behandeln, können wir die durchgängige Emporsteigung seines Interesses für HUMBOLDT und den sichtbaren Weg zur seinen Habilitation erkennen. Seine Absicht war schon theoretisch und zwar praktisch, wie HUMBOLDT sich seinen neuhumanistischen Gedanke bildete und in seiner Reform des Bildungswesens eigene Konzept führtet durch. Für SPRANGER war HUMBOLDT in dem Kreuzpunkt der verschiedenen Strömungen, z.B. Neuhumanismus, deutsche Idealismus, Erziehungsgedanke und -praktik, gestellt. In diesem Sinne die Habilitation SPRANGERS funktioniert in der Synthese zwischen philosophisches Interesse und pädagogisches.

Und zugleich projiziert SPRANGER in seiner Habilitation die Auflösung der damaligen und drängenden Aufgabe, die seit Wendepunkte des Jahrhunderts in den Geisteswissenschaften zur Diskussion gestellt wurde: Positivismus und historische Relativismus, die er schließlich in der Beziehung des Wert-Problems bringt. Dafür dabitet er die Humanitätsverfassung, in der die drei und durch ihn aus Gedanke HUMBOLDTs übersetzten Momente, d.h. Individualität, Universalität, Totalität, verläufig aber harmonisch in persönlich-künstlerische Form erreicht werden. Für SPRANGER war die Humanitätsidee HUMBOLDTs sehr wichtig, weil sie nicht noch in seiner Zeit erschöpft ist und also damaliger Konstellation gemäß wiedergewonnen werden muß. Wir können in seiner Habilitation und kleiner Humboldt-Abhandlung ein Denkmal seiner Jugend empfinden.

Seine Hoffnung war das, daß es die Möglichkeit der Übereinstimmung mit dem Unendlichen (Universalität) in dem Endlichen (Individualität) gibt, die Totalität ist.

はじめに

本稿は初期シュプランガーの全体的理解を目的として取り組まれるものの一つである。周知のことだが、彼はベルリン大学創設100年に照準を合わせるかのように、その創設の立役者ヴィルヘルム・フォン・フンボルトについて、矢継ぎ早に大小二つの著作を公にした。それらは、

彼が一方では思想的（理論的）に、他方では歴史的（実践的）に探求したものであり、様々な方面で評価されるとともに、大学学習時代にヤコービに関するテーマが原因となって長い深刻な不和を生んでいたディルタイとの関係も改善することとなった。だが、彼を理解しようとする上で、ここには一つの疑問が持ち上がってくる。すなわち、フンボルトに対するシュプラン

ガーの関心は、なぜ、どのようにして生まれ高まったのであろうかという問いである。彼自身はあまり明らかにしていないが、彼の大学学習時代から1909年の『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとフマニテートの理念』(以下、「教授資格論文」と表記)やルドルフ・レーマンにより編集された「偉大なる教育者」シリーズのために第4巻として書かれた1910年の『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと教育制度改革』(以下、「小フンボルト論」と表記)、そしてシュプランガー自身が同年に編集し序説を書いたフィヒテらの19世紀初頭の大学論集(以下、「大学論序説」と表記)へと至る10年間の道筋には、シュプランガーがフンボルトを自らの考察の対象として見出した一定の辿り得る糸があるように思われる。本稿が手探りしようとするのは、この一点に絞られる。したがって、本稿はシュプランガーのフンボルト論それ自体には深く入り込むつもりは未だない。また、二次文献の使用や大学人の社会史にシュプランガーのフンボルト論を位置づけることも必要であるが、特に後者は本稿では注記で示し、本文ではシュプランガーの文章に限定する。「それぞれを歴史像において正しく彩るために不可欠である」(N039,S.V)として彼がフンボルト理解の際に述べたのと同じ意図から行う引用が本稿では多く、そのために混乱した印象を与えることは否めない¹⁾。このことは先に断っておく。

【 1 】

1909年に出版された弱冠27歳のエドゥアルト・シュプランガーの教授資格論文は500頁にも及ぶ大著であり、それだけに些細な思いつきから生まれたような論文とは到底考えられない。むしろ、彼固有の様々な事情からすれば、つまり

彼自身の実存的契機、そして教養市民層に属さず、しかも社会的な変化により貧しい状況に置かれていた彼が大学人となるために命運を問う研究論文としての学的意義、さらには自らの主張から時代の学問や教育に対して期待した影響からして、極めて用意周到な積み重ねを必要とするものであったと想定すべきであろう。にもかかわらず、彼がいかなる経緯でフンボルトに対して関心を持ち始め、それを発展させていったかは判然としていない¹⁾。確かに、彼の通ったベルリン大学の創設者がフンボルトであることは、関心を引いた背景として十分に考えられる。事実、教授資格論文の序文では、「著者が誇りを持って自らのアカデミックな予備教育を受けたことを感謝する場を創造したのがフンボルトであった」(N039,S.VI)と言われている。また、金銭上や母の病の問題があったことが何よりもの理由であったろうが²⁾、彼が一度も転学することもなくベルリン大学に留まり続けたことも、フンボルトに対するいわば愛着を育てたと推察することもできる³⁾。さらには19世紀が全く知ることのなかったフンボルトの文書を、アルバート・ライツマン⁴⁾が1904年から編集した『フンボルト著作集』⁵⁾やフンボルトと多くの人々が交わした多くの書簡集を通じて手にすることができたこと、1896年にゲーブハルトによって初めてその一部が公にされ、1900年にアドルフ・フォン・ハルナックの『ベルリン王立プロイセン学術アカデミーの歴史』に全文が掲載されたフンボルトの覚え書「ベルリン高等学術施設の内的ならびに外的組織に関して」に目を通すことが可能になったこと、そしてフンボルトの多くの文章が埋もれていたために彼に関する当時の第二次文献の数も少なく⁶⁾、資料不足からそれらが誤解を含んでいたこと——例えばルドルフ・ハイムはフンボルトを生涯に渡っ

てカント派であるとしていた (Vgl. MSt,S.224) —も、シュプランガーの研究意欲を刺激したことも疑いがない。「フマニテートの哲学者の中で最終的に W・v・フンボルトが私にとって前景に立ち現われてきた。その理由は、彼の著作のアカデミー版の中には、まだ全く利用されていない十分な新しい資料があったからである」(MSt,S.224)。そして、周知のように、ヤコービ研究を巡ってのディルタイとの軋轢から、シュプランガーはフンボルトを見出したときの気分とは正反対とも言える「全くの困窮は死んだ歴史に関わることから現れるという確信」(MSt,S.208) でディルタイからの課題を返上し、パウルゼンのもとへいわば逃避したが、その研究は同時に書簡や対話でヤコービとやり取りのあったフンボルトを具体的に知る一要素ともなったと思われる。加えて、理論上におけるディルタイと並んでパウルゼンは、例えば高等教育学同盟の大学教員ゼミナール提案や初等教員の大学での養成要求に反対する姿勢、初等教育における郷土科の強調、教員ゼミナールの高等教育機関化などの教育実践的な問題において、彼にとって決定的な導きの星となっている⁷⁾。死期が迫る中、自らの課題であったフンボルト論をシュプランガーに託したこともさりながら、パウルゼンが彼のフンボルトに対する関心を高める役割を演じていたのは間違いない。他方、現実問題として何よりも彼はいち早く大学人とならねばならなかった。彼が教授資格論文を持ってあちらこちらに働き口を見つけようとしていた頃の文章は、彼の悲痛な胸の内を伝えているとともに、再生産型の教養市民層とは隔絶された世界を「遅れてきた教養市民層」の一員として生きていたことを窺わせる。「私が期待していたのは、雇われることであった。……既にかなりな借金があった。……私の母は (肺結核で)

ずっとベッドに寝たきりになっていた。……午前中には学校教育を受けていないお手伝いが来ていたが、彼女にも既に支払いができない状態であった。それは私にとって二重に辛いものであった。……というのも、私は26歳にもなりながら、何がしかをもたらすような職を何も持っておらず、結果として家庭の困窮を取り除くこともできなかったからである」(MSt,S.228-229, 補足は引用者)。1900年代の彼は一概にこうした切羽詰った状況だったと推察できる——それは後に示す小論「フマニテート」の暗澹たる雰囲気に如実に表れている。大学入学当初望んでいた純粹哲学的研究ではない (Vgl. MSt,S.197) フンボルト研究は、彼がそうした苦しい焦りから一気に選び取られた当座のものともさえ思えるほどである。とはいえ、やはりこれらはフンボルトに実存的にアンガージュしたことに対する間接的な証拠立てにしかならない。第2次世界大戦末期の回顧録では大学時代の状況をかなり詳細に記しているのに対して、教授資格論文を巡っては「本来、私はドイツ古典主義時代一般のフマニテートの理念を描きたかった。そこで私の哲学的関心と教育的関心とを総合しようと思った。しかも私は……我々の人格理想をドイツ人固有の源泉から創り出すことを示したかった」(MSt,S.219) と振り返られる程度である。また、「……人文主義的なものが私の唯一の目標です。この人文主義的なものは固有の領域、固有の充実、人間的なものの絶え間のない研究からのみ獲得され保障されるものです」(SpH,S.92) と1907年に書いているように、教授資格論文執筆中の書簡でも、確かにフンボルトの教師であった汎愛主義者のカンペではなく、「ドイツの偉大なる時代」の功労者が選ばれたことは理解できるとしても、研究対象が他ならぬフンボルトへと収斂されていく事情はなかな

か見えてこない。こうした発言は、せいぜい当時のシュプランガーの哲学的関心と教育的関心の総合という構想が、新人文主義の時代においては彼にフンボルトへとつながる可能性を持つことを暗示させるにすぎない。

しかしながら、フンボルトへのシュプランガーの共感には既に早い時期から形成されていたとも考えられるところがある。本稿が知る限りでは、1904年以降のケーテ・ハートリヒ宛てのいくつかの書簡にそれを見ることができる。この年の10月7日、つまり『歴史学の基礎』(以下、「博士論文」と表記)が完成した時期の書簡では他の思想家と並置されつつ、フンボルトに関しては「比較にならないほど精神性豊かな人物」という書き足しが見られる (SpH,S.57)。そこでフンボルト以外で一定の価値が付されているのは「深く内面的で宗教的な」という言葉を伴ったランケだけであり、その意味で既にこの時期、シュプランガーがフンボルトに特有の関心を持っていたことが推測される。また、博士論文の口頭試問 (1905年2月2日)も既に終えた秋には、彼は教授資格論文の課題の選択に悩みつつ、フンボルトの心理学について研究する意図が臆げながらあることをケーテ・ハートリヒに告げている (Vgl. GS7,S.17)。そして、この構想はハイムの『ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、生涯像と特性描写』(1856年)への熱中した読書生活とおそらくは平行しつつも、シュプランガーのかつての——絶えず影響を与えていた——恩師ボルハルトとの対話を通して、彼を次のような決意へと至らせる。すなわち、「課題はこうです。シラーとフンボルトのフマニテートの理念に見出した哲学的技術的 (philosophisch-technisch) 定式化を、時代の生や、例えばヴィルヘルム・マイスターにおける彼の目論見、経済や教育制度など同一のものとして証明する

という課題です。同時に示されねばならないのは、この問題がある一定の文化状況で非常に内的な必然性を伴って現われているということ、そしてそれが私たちに対しても存続しているということです」(1905年9月21日のケーテ・ハートリヒ宛ての書簡から、SpH,S.74)。こうして彼にとってフンボルトは生きていような存在となった (Vgl. SpH,S.76)。教授資格論文の序説の冒頭は、このことをはっきりと打ち出している。「何らかの秘められた紐帯によって現代と結びついていない歴史記述というものは存在しない」(N039,S1)。このように、書簡では1905年までにフンボルトはシュプランガーの現在と連結する歴史的人物として映り、1906年あたりに開始される (Vgl. KSd, S.14) 教授資格論文の一義的な対象となり始めていた。

他方、1905年の博士論文にも、後に本格的にフンボルトを取り上げることになる伏線が見出せる。シュプランガーによれば、歴史研究では理解しようとする者は他者の心的生に身を置き入れねばならない (Vgl. N006,S.77, S.87)。しかし、感情移入でも他者と同一には決してなり得ないために、「芸術家的な複合直観」を用いて「個々の諸関係の全面性を想像力で捉え」ていくより他ない (N006,S.77)。「想像力がなければ、そして合わせて見るという芸術家的な才能がなければ、我々が歴史的な運動の考えの広さを捉えることはできない」(N006,S.125)。とはいえ、そのためには感情移入や想像力を歴史研究へ導入可能とする学的裏づけが必要である。そこで彼は「歴史的認識の論理的な要求を十分に可能にする心理学の方法論的基礎づけ」(N006,S.19)を目論み、社会心理学でなく個人心理学のみに認識論的権利を与えようとしている (Vgl. N006,S.77)。したがって、歴史理解の出発点は「心理的体験の唯一の場」(N006,S.76)である

個体であり、「個人の体験の中で優勢な目的論的構造を直接に歴史や社会へと拡大していく」ことを彼は求める (N006,S.77)。そしてこのような観点からすれば、歴史研究は彼にとっては必然的に人物研究、例えば類型的傾向の伝記的叙述となる (Vgl. N006,S.100)。フンボルトを生活史に基づいた個人的な特性描写から始めて、思想形成を経て、1809年の教育制度改革の実践にまで突き進む過程の中で追体験しつつ叙述していくという点で、フィヒテやシェリング、あるいはゲーテやシラー以上にフンボルトは、シュプランガーの「哲学的技術的な」興味をそそるものになり得た。こうした手法は彼が何よりもディルタイから学んだものであるが、彼の書簡の次の言葉は教授資格論文の方向性をも先取りするものである。すなわち、「何よりも (ディルタイとの同形性が指摘可能な) ドロイゼンの重要な命題、つまり人間が他者の理解を通して初めて総体性 (Totalität) となるという命題によって、私は全く新しい思想の流れに導かれ、そして歴史研究において現代的関心や意識されざる衝動を解明しようとするところに至りました」 (GS7,S.10, 補足は引用者)——なお、これと全く同様の引用は博士論文でも見られる (Vgl. N006,S.76)。いずれにせよ、博士論文における歴史理解への取り組みがフンボルトをシュプランガーに見出させる契機ともなり得た。

こればかりではなく、彼は博士論文の中で実際にフンボルトに直接言及している。何よりも第3章「心理学的な歴史把握に対する形而上学的な歴史把握の関係、両把握の19世紀における分離の過程」において、フンボルトに関する記述は詳しい。その章では歴史における自由と必然のアンチノミーの問題がカントからランケに渡って逍遙されている。その際、シュプランガーは、フンボルトが「歴史記述者の課題に関して」

1821年に行ったアカデミー講演を取り上げ、彼が個 (心理学的なもの) と理念 (形而上学的なもの) の矛盾する、あるいは排斥し合う対立の問題を捉え直して、このアンチノミーにどのような回答を与えていたかを扱っている。彼によればシェリングやヘーゲルがそれを形而上学的な原理で解決しようとしたのに対して、フンボルトは歴史における個の生動性を排除することなく、同時に普遍的な目的論的把握を認めるといふ「極めて現代的な」「教えるところの多い」 (N006,S.33) 考え方を示しているとする。「形而上学的なもの」と心理学的なものとの境界現象である歴史を把握する中庸で「非常に幸運な芸術的方法 (Kunstmittel)」 (N006,S.35) を提示したのが、彼にとってはフンボルトであった。そして、これは先の書簡で彼によってフンボルトと同様に肯定的に評価されていたランケの理念論に通ずる道であった。したがって、ランケの説明の際に述べられる次の言葉は、大筋でフンボルトにも当てはまるものと考えてもよい。すなわち、「あらゆる生、そして歴史的なものでさえもが形而上学的な背景の上でのみ生起することができるが、我々はその背景を予感しはするとしても、そこへと入り込むことはできない。その背景は実在性として存在するが、知識においても理解においても解決することができず、むしろそれは芸術的直観に対して、つまり想像力を実り豊かなものにする <記述> において模索されねばならないものである」 (N006,S.37)。確かに、ここで扱われたアカデミー講演は、教授資格論文の便宜上のフンボルトの時期区分——シュプランガーは第1期を1789年から1798年まで、第2期を1798年から1820年までとしている (Vgl. N039,S.40)——に属するものとは必ずしも言い難いが、フンボルト自身の思想発展の一つの結実の性格を持つとシュプランガーに

よって考えられていたものであり、フンボルトがそこで展開した歴史記述におけるアナロジーの考察から後に「美的な中間領域を発見することによって」得られる「理念的美的アナロジー」(N039,S.24) という方法を当時のシュプランガーに与えたものであった。事実、博士論文ではフンボルトの考え方は「歴史哲学的思考の頂点」とされている (N006,S.123)。

さらに博士論文には既にフマニテートについても言及されている。例えば、本稿が後に教授資格論文において展開される総体性を「形式化された個性」として示すように、博士論文でも次のように言われている、「フマニテートの理想は何よりももっぱら個体に関係づけられている」(N006,S.132, Vgl. S.140)。また、この論文では歴史研究が人格の形成に決定的であることも結論づけられている。「歴史的教養は……全人格の本来の素質として我々に現われる」(N006,S.143)。以上のように、彼にとってフンボルトは、ギュムナジウム時代から形成された人文主義への共感⁸⁾が、「歴史を生き生きとしたものとして学的に記述することはいかにして可能か」という課題意識の中で、他者の助言もあって次第に単に理論にとどまらない教育(学)的関心の対象として深まりを見せた結果として視野に入ってきたと言えるであろう。だが、フンボルトについての直接的な言及がないとしても、教授資格論への重要な布石となる文章が、博士論文以前に世に問われており、これらに触れてみることは、本稿にとって無意味な作業ではあるまい。というのも、教授資格論文は「1904年の諸論文の中で取り扱った純粋な美的世界観を研磨した」(KSd,S.15) ものだったからである。

【 2 】

1904年の小論「フマニテート」は、シュプランガーの当時の時代診断とそれに対する処方箋としてのフマニテートの強調という形で進められている。彼は自らの時代を「暗澹とした感情」(N003,S.1)の現在、「最も内的な困窮」、「無気力と無力さ」(N003,S.3)、「生の統一的な流れが欠如する」中で教育理想を探し求める「永遠の分裂」の時代 (N003,S.2) と、たたみかける重苦しい言葉でつづっている。殊に彼には「自己喪失の危険性」(N003,S.2)が愁眉の問題であった。それ故に、彼はその危険性を克服し一体性 (Einheit) に根づくものとして教育理想を要求している (Vgl. N003,S.2)。そのために彼は、一般的人間的な教育力、自らの性格を形成する力を有していたドイツの古典主義時代の再作動に期待する (Vgl. N003,S.2)。その時代が古代ギリシャからフマニテートの理想を復活させたように、その時代から再び同じ試みを現在において行うことを彼は求めている。次の言葉は、教授資格論文の序説の冒頭を思い出させる点で重要である。すなわち、「我々は歴史的報告ではなく、こうした(一般的人間的な、つまりフマニテートの)観点から現実に接近するように試みなければならない」(N003,S.2, 補足は引用者)。彼にとってその時代のフマニテートは、キリスト教と同様に汲み尽くされてはいなかった。その形成力を蘇らせることによって束の間の調和を鳴り響かせようとしている。しかし、彼にとって自らの時代は「より高次の個人的展開の中間形式の状態」(N003,S.1)にあり、その状態における解決がもっぱら望まれる。それは彼にとっては芸術であった。そして、そこにフマニテートの意義が改めて見出される。「フマニテートは精神的な現実存在の芸術形式、

人格の芸術形式である」(N003,S.3)。無論、ここで危機感を持たれているのは、芸術そのものではなく、自己、個人的展開であるから、彼には教育の改革が課題となる。「教育の技術(Technik)は……芸術家の独自性へと舞い戻るべきであり、それ故、その技術は我々の存在と融合し我々の中にまどろんでいる力を解放するべきであった」(N003,S.3)。このようにシュプランガーは、世界観という中心点を失った自己喪失の状況とそこにいる人間を教育を通して芸術作品のように調和させる、フマニテートを、分裂と調和を一時的に架橋する中庸なもの(das Maßhabende)としている(Vgl. N003,S.2)。フマニテートはシュプランガー自身の人格の課題でもあった。この小論の最後の一文は明らかに教授資格論文に接続するものである、「概念に抵抗する人間性(Menschheit)の永遠の経験は、芸術の装いをしながら、あらゆる時代にとって実り豊かなものとなる生を導くものなのである！」(N003,S.3)¹⁾。

一方で、学生シュプランガーが小論「フマニテート」において分裂と調和を架橋する芸術作品としての人間を教育を通して目指していたとすれば、同じ年にもう一つの文章「想像力」を公にしたことも何ら不思議なことではない。そして、この小論は先に見た博士論文の歴史研究における想像力の考察にも関連してくるという点でも興味深いものである。そこではまず想像力の自己形成的側面が重視されている。「その力(想像力)の中で自己自身を再発見し、表現することができる」(N004,S.697)。だが、想像力によっても最終的な自己自身は知ることはいできない。「想像力の形象と現実との間にある溝が完全に架橋されたことなど一度もない」(N004,S.698)。他方、想像力の形象とは「理想主義的に誇張された」出来事であり(N004,S.697)、現実

とは幾分無関係に獲得された理想である。しかしそれ故に、想像力は自己形成的に働くばかりでなく、他者形成にも関与し得るものとなる。「あらゆる教育は、生において成熟した人物が、成長していく者が規定された理想的な形態を、予感しつつ先取りすることを可能にするところに基づいている。真の教育者は……子どもたちの中に潜んでいる称賛されるべき人間と理想的な人間を救い出そうとする」(N004,S.698)。したがって、想像力は、教育にとっても重要な働きであり、理想化する者のみが「現実人間を高く引き上げる(emporziehen)」(N004,S.698)。これはちょうど想像力の理想化において、素材が芸術作品へと高められるのと同様である。それ故、人間は理想がその時々形をとったものと言える。先に小論「フマニテート」でも、フマニテートが多様な形態をとるという重要な考えを示していたが、以上のことを踏まえれば、フマニテートは想像力を媒介として素材(子ども、人間、自己)が作品、「純粋な人間」(N003,S.1)にまで高められたそれぞれの人格の芸術形式ということになる。また興味深いのは、彼が人間と同様に、想像力を育てるという「理想が形態化する場」(N004,S.698)として歴史を挙げている点である。しかし、それでもなお想像力の形象(調和、作品、純粋な人間)と現実(分裂、素材、子ども)の完全な架橋はあり得ないのであったから——先取りして語れば、普遍性と個性との完全な一致はあり得ず、その時々総体性において形態化せざるを得ないのであるから——、全き調和はあり得ず、したがって「問題設定的な本質(problematische Natur)」(N004,S.698)が残ると共に、それ故に、あるいは「にもかかわらず(dennoch)」人間も歴史も可塑的、再創造的であり続ける。書簡からの引用で補完すれば、「すべて歴史的なものは、そ

れが再生すべきであるならば、新たに創り出されねばならないものなのです」(GS7,S.9)。また、この小論でも、その調和は瞬間的なものであることが繰り返される。「我々が見たり聞いたりするもの、それは……人間の内面から束の間に示された想像力の絵画である」(N004,S.698)。このように1904年の2つの小論は相互に補い合うものであると同時に、博士論文の先述の箇所へもつながり、さらには後に見るように教授資格論文の原型ともなっている。また、この時期の文章では今示した3つのモメントこそないものの、教授資格論文で重要な役割を果たす言葉もほぼ出揃っている。大学学習時代において既に、フマニテートと想像力とは人間を形成する力である歴史、教育力としての歴史にとっての鍵であり、それらはやがて、彼が「本来作家にさえなり得なかった」(N045, S.352)と評するフンボルトの思想とその具体的な現われを考察する中で結晶化することとなる。

【 3 】

これまでに明らかになったのはシュプランガーが、大学での学習を通じてドイツ古典主義時代におけるフマニテートの思想から、芸術作品としての人間という考え方を獲得し、それが歴史にも適用可能であり、そのために想像力が学問研究の手法として必要であると考えたこと、またその力によって獲得された形象と現実とは完全に一致せず束の間の融和にすぎないが、それ故に人間や歴史には可塑性があったとしたこと、そしてこれらの内容が教育の課題でもあると考えるに至ったことなどである。そして、こうしたことが最も明瞭に具現化された最良の事例としてW・v・フンボルトが彼に浮上してきたと考えられる。それでは、彼の教授資格論文に関

連する著作を用いて、彼の内的動機をさらに探っていきたい。

さしあたり、本稿がここでまなざしを向けたのは、雑誌『カント研究』におけるシュプランガー自身による教授資格論文の自著紹介(N054)と小フンボルト論(N058)、大学論序説(N060)である。というのも、これらは論文完成後の作業であるだけに、示威的行為の性格を持つと同時に、教授資格論文の背景をなしつつも、そこからは見えてこない彼の意図がこれらに潜むと考えられるからである。最初のものでは、まず先述したハイムの誤解を指摘し、フンボルトが思想上でカントから(フィヒテを経て)シェリングへと移行したとされる(Vgl. N054,S.134)。だが、これはこの論文の主要な対象ではないと直ちに否定される。むしろ彼が明らかにしたかったのは、「自己陶冶と内面性の文化を求める」フンボルトの「ばらばらになっている言明のすべての背後に、確固とした体系が存在すること、そして彼が常に新しい端緒において彼の内的生活の素材から、人文主義的な教育理想において頂点に達する一つの哲学を作り上げていたこと」(N054,S.135)であった。先に示した『フンボルト選集』などを利用し尽くそうとする狙いがここに改めて確認される。それと同時に、彼はフンボルトのフマニテートに美的なものを見るだけでなく、それに倫理的な形式附与を加える必要性を感じている(世界観としての芸術作品)。「私のはっきりさせたかったことは、最高次の芸術的創造が人格の完成に対する単なるアナロジーではなく、むしろ倫理的な総体性から根源的で秘密に満ちた原理が我々に対して明らかになるということである。この原理は我々が芸術的な形式において……再発見するものである」(N054,S.135)。そして、当時の生活に対する考え方や学校組織への働きかけ

を目論んで序説と結論を記したことを終わりに表明している。教授資格論文完成直後では、これらがシュプランガーの強調したい目的であった¹⁾。

一方、小フンボルト論はその初版の序文において「偉大なる教育者」シリーズにおける課題をパウルゼンから引き継いだ事情が、第2版以降よりもより詳しく述べられているが、本稿にとって重要なのは、この著作が哲学的発展史的な意図を持った教授資格論文を前提としたフンボルトの実践的展開を取り扱っていることである (Vgl. N058,S.VIII-IX)。そして、そこに最も注目すべき一文が見出される。すなわち、「教育の問題と本質を W・v・フンボルトほど哲学的連関において深く捉えている者はいない」(N058,S.IX)。シュプランガーにとってフンボルトは哲学と教育(学)、あるいは思想と現実の交叉点に位置する人物となっていた。振り返って1905年1月24日のケーテ・ハートリヒ宛ての彼の書簡は、この意味において理解可能なものである。「……私は哲学的な意味において哲学者よりも教育者が天職のようです。……時折私には、私にとっては哲学が私の通過段階にすぎないかのような考えが現われてくるのです。と言いますのも、私には現実を概念で押し通すよりも、哲学を体験的に形成していく欲求の方が強いからです」(SpH,S.38)。既に引用した1945年に語られた「哲学的関心と教育的関心の総合」を、彼はフンボルトに直接に見るようになっていた。

ところで、こうした交叉点・合流点に位置するフンボルトという彼の観点は、教授資格論文がフンボルトを限定的な対象として取り扱っている一方で、小フンボルト論が時間的に幅のある教育状況や思想潮流の中にフンボルトを位置づけている点で、後者に言及する必然性を本稿

に与えている。この観点はとりわけ重要なものである。シュプランガーによれば、第一の潮流はルソー、ライプニッツ、ヘルダー、ドイツ・イデアリズム、フンボルトとつながる「生の総体性という福音」(N058,S.2)の流れであって、「全体的普遍を……自ら担っている個体の首尾一貫性、より高次の発展を求める止むことのない衝動、無限の進歩への喜ばしい信仰であり、……最終的に神的な完全性の調和において明らかになり、その調和においてあらゆる善が合わさると同時に、あらゆる美の頂点に達するという確信」(N058,S.3)、つまりフマニテートの潮流であった。また、この流れは教育的熱狂をも伴っていたが、その教育理想主義は汎愛主義にも引き継がれつつ、一方では新人文主義、つまり教養世界へ、他方ではペスタロッチ、つまり民衆世界へ行き着く。それ故、第一の流れと並んで、ルソーからヴォルフ、新人文主義を経てフンボルトへとつながる第二のものと、やはり同様にルソーから始まって、汎愛主義、ペスタロッチ、フンボルトへと現実的につながる、正確には部分的に接続する可能性のあった第三の流れがある (Vgl. N058,S.3-4)。しかし、そうした思想や教育の潮流ばかりでなく、新人文主義の中に主要な3つの段階をシュプランガーは示している。その理念の実践的導入の時期、「芸術と生に対する従来のルネサンスの理念を更新」した時期、そしてフンボルトが属する「哲学的に基礎づけられた教育理論へとその姿を変える」時期である (N058,S.5)。さらに、おそらくはフリードリヒ・マイネッケの著作『世界市民主義と国民国家』の影響を受けて、「1792年から1817年までに」——教授資格論文におけるフンボルトの時期区分のおおよそ第1期と第2期に——「国家との敵対関係から国家イデアリズムへとゆっくりと発展している」ドイツ・イデアリズムの中

にもフンボルトを位置づけている (N058,S.6)。シュプランガーはこうしたすべての線上の交点にフンボルトを配置した。別言すれば、時代のすべての流れを思想上実践上で実現したのが、フンボルトであった。彼にはフンボルト自身が既に「完全に展開した全体的人間」(N058,S.15)であり、フマニテートの理念として取り扱いは得る「特殊な現実存在の形式」(N058,S.44f.)そのものであった。「この理念を有機的に展開したのが、W・v・フンボルトである。一つの言い回しにすれば、彼の行動は教授活動のあらゆる段階で、つまりペスタロッチの精神における基礎段階で、新人文主義の意味における教養学校で、そして有機的な学問の総体性の哲学的理念における大学でといったように、すべての段階での教育の形式的な普遍性の国家的な承認である」(N058,S.15)。小フンボルト論では研究対象としてのフンボルトはもはや偶然の対象ではなくなっている。この観点は既に教授資格論文で確定されている。「フンボルトは新しい理想のモチーフを絶えず追跡した後に、明瞭な精神で……あらゆる傾向をまとめた者であり、それら自身を体験し、最終的にそれら自身を社会的な現実へと導入した者である」(N039,S.12)²⁾。小フンボルト論が書かれる必然性もここにある。

ところで、対象が限定されたものであるために、S・パレチェクが言うほどフンボルトの重要性が指摘されているわけではないと思われるが³⁾、ベルリン大学創立100年記念祭に合わせて公刊されたフィヒテ、シュライエルマッハー、シュテッフエンスの大学論の編集に際して添えられたシュプランガーの序説も小フンボルト論と同様に、ハルナックが1900年に公にしたフンボルトの文章に依拠して、ベルリン大学誕生の様子が叙述されている。この3人の中でシュプ

ランガーが高い評価を示しているのは、もちろんシュライエルマッハーである。「(シュライエルマッハーの)この著作がベルリン大学の理念的塑像を含んでおり、この大学が誕生する出所となった精神を最も親密に語っている」(N060,S.XXXIIIf.)——パレチェクは、ベルリン大学をシュライエルマッハーの作品であるとしている (Vgl. Paletchek2001,Anh.9)。というのは、フンボルトがシュライエルマッハーを大学開設の特設委員会のメンバーに選ぶほどに、フンボルトの固有の理念に彼が近づいていたとシュプランガーは見えていたからである (Vgl. N060,S.XXXII)。その理念とは言うまでもなく学問の未完成性、学問の進歩性、学問の有機的全体性である。「大学は理念に従えば、学問の普遍性の組織化である。いかなる個々人も大学においては、個々人と全体との連関における態度に制限されている」(N060,S.XL)。この態度は次節で詳細に見ていくフマニテートの理念の学問における形態であるが、教授資格論文で非常に様々な角度から光を当てられたフンボルトを、大学論序説ではすっきりとした一文で次のようにまとめている。「フンボルトは理念と現実の個性とを結婚させることのできる、しかるべき生の芸術家であった」(N060,S.XL)。

このように、学生時代以来フンボルトは次第に、シュプランガーの研究対象として、また彼自身の内的な自己形成の対象としても必然性を帯びてきた。さて、小フンボルト論も含めながらではあるが、次節においてシュプランガーの教授資格論文に少しばかり足を踏み入れ、それが一つの線に位置していることを明らかにしたい。

【 4 】

小フンボルト論に対して、まさに大フンボルト論とも呼べる教授資格論文の序文と序説、結論には、これまでに見たようなフンボルトが選出された理由と目的はもちろん、その論文独自のシュプランガーのフンボルト解釈、彼固有の目論見をも看取することができる。既にヘルダー没後100年を契機に書かれた1904年の「フマニテート」でも言われていたことであったが (Vgl. N003,S2), 教授資格論文の序文ではドイツ人文主義時代の代表者と共に、「何よりも」という付加語を伴ってヘルダーとフンボルトが挙げられ、「そうした人々は彼らの生の直観の中核がより一般的な財産となっていない限り、……まだ汲み尽くされていない」(N039,S.VI)とされている。この中核とはドイツ人文主義の教育理想、言うまでもなくフマニテートであったが、それはシュプランガー自身の自己形成の過程を規定したものであった (Vgl. N039,S.VI)。まずもって現代におけるフマニテートの再獲得を主張することが、彼の目的であった。そして、これが要求されるのは、彼の学生時代以来の時代診断からであり、1909年でも繰り返されている。「……調和に対する楽観的な信仰に代わって優勢になっているのは、絶えざる危機と均衡動揺の圧力である。この世界に生を受けた人間は、泥の舟 (schwanker Kahn) に乗っている」(N039,S.494)。この点で彼はまずは一貫している。

ところで、そうした目的を持ったフンボルトに関する歴史研究は、学問的判断を誤らないために叙述者の「現代の関心を最初に信仰告白し、……その関心を意識化すること」(N039,S.1), 価値判断を認めねばならなかった。したがって、ここから価値自由な実証主義の実証性とは異なる

る価値の取り扱いという問題が発生してくる。また、当時の歴史学においては相対主義が問題となっていた——既に博士論文で相対主義は「現代の無価値な恐怖の亡霊」と呼ばれていた (N006,S.118)。これら2つの問題は、周知のようにシュプランガーの生涯に渡る対決の対象となっているが、彼はそのどちらにも組していない。彼は教授資格論文でこれらを取り上げ、これに対して「フマニテートの状態 (Humanitätsverfassung)」で対抗しようとしている。だが、これを理解するためには、あらかじめ個性 (Individualität), 普遍性 (Universalität), 総体性 (Totalität) というシュプランガーが教授資格論文でフマニテートのメルクマールとして示した彼独自の——正確に言えば、彼がフンボルトの考え方から翻訳した——3つのモメントに触れておかねばならない。その際、教授資格論文 (N039,S.13ff.) と小フンボルト論 (N058,S.46ff.) を比較すれば、前者が抽象的であるのに対して、後者はより理解しやすいものであり、両者を用いることは好都合であろう。さしあたり、フマニテートの状態へと至る出発点は個性である。それは「関係の点」(N058,S.46)であり、確かに一面的ではあるが、「心の一切の表現のエネルギーはその力に基づいている」(N039,S.14)。特徴的なことはそのエネルギーがフマニテートの状態でも解消されないとする点である。結晶の核としての個性は止揚されても、廃棄されるのではなく、保存されている。とはいえ、個性は常に制限されているため、そのままでは偶然で素朴な点であり、線にはなり得ない。それ故、そこに「とどまろうとしない者なら……自らの個性の内部で理想を獲得しようと努力することを試みざるを得ない」(N058,S.46)。これは教授資格論文では「個性の拡大」(N039,S.14)、小フンボルト論では「普遍へのある種の

拡大、あらゆる側面へ向けての有限なものの超出 (Ausschreiten)」(N058,S.47) と呼ばれるものである。ここに第二のモメントである普遍性——またこれは全面性 (Allseitigkeit) とも呼ばれる (N039,S.14)——が、個性の内面にあるものを豊饒化や純化するために求められてくる (Vgl. N039,S.14; N058,S.47)。ここで先に博士論文でも取り上げられたものが、個性と普遍性相互の還元不可能性として新たに現われている。「個性は自らの反対物、つまり普遍性なしには無である」(N058,S.47)¹⁾。そして、この2つのモメントが統一へと形成され、形式へと結びつけられる。「個性は普遍性を通して全体へと努力する」(N039,S.14)。その際の尺度が第三のモメントの総体性である。こうして個性は内面から自己形成することを通して、一つの形式へと達する。「これが人間の個性の形式衝動であり、その背後には全く完全に人間であるという衝動に他ならぬものが生きている」(N058,S.48)。シュプランガーはこうしたモメントが1789年から1798年までのフンボルトの文章に繰り返し現われていることを指摘している (Vgl. N058,S.48)。この3つのモメントは「素材が理想を介して形式となる」という大学時代からの彼の考えが、フンボルト研究を通じて学問的に純化されたものであった。敷衍して言えば、その時々点としての個性が、点の複合としては成立し得ない線である普遍性へと超出し、それを介して形式化された個性とも言える総体性へと帰還しようとする終わることなく運動し続ける自己形成 (Bildung) のあり方を、シュプランガーが先行的ではあるが伝統的な表現で獲得していたとも考えられる。

それでは、これら3つのモメントはフマニテートの状態では、つまり個性が一つの形式や人格に至った状態では、いかなる関係にあるのだら

うか。その状態では普遍性が客観的な状態を可能にしているが、同時に個性は保存されていたから、個体は「他ならぬその人間」であり、主観性は廃棄されていない。ところで、普遍性のモメントは「あらゆる個人的な価値づけを度外視している」(N039,S.30) ために、実証的な学問の根本傾向 (価値自由) を有しており——それをシュプランガーは「実証性 (Positivität)」と呼んでいる——、個性のモメントは人格的な態度決定 (価値づけ) のために芸術的倫理的傾向、価値判断を否定しない精神諸科学の傾向を有している——これは彼によって「人格的自己性 (persönliche Selbstheit)」と呼ばれている。それらは一見したところ二元論的に対立しているが、彼は総体性のモメントを通じて成立した形式においては「一致の可能性」をも見る (N039,S.31)——「フマニテートの理念は……二元論というものを知らない」(N039,S.13)。つまり、フマニテートの状態では「フマニテートと実証性とは相互に結びついている」(N039,S.31) のであり、それ故、実証主義の価値自由・価値中立、過剰な理想主義 (Hyperidealismus) に対しては個性のモメントが、相対主義の価値乱立、過剰な現実主義 (Hyperrealismus)²⁾ に対しては普遍性のモメントが、それぞれ極端な偏向を中和するように働いている。フンボルトの考え方はこのような19世紀末以降の学問的危機に対して示唆的であったために、シュプランガーにとって時代が再獲得すべきものと映っていた。そして、こうした直観は既に1904年の文章や博士論文にも見られたものである (z.B. N006,S.VII)。このように教授資格論文の目的が単にフンボルト研究にとどまらず、実証主義 (例えばランプレヒトの) や歴史主義的相対主義 (例えばディルタイの) との対決を隠れた目的とし、その解決の鍵をフンボルトに見ようとしていた。いず

れにせよ、フマニテートの状態では、総体性という中庸 (Maß) の形式が獲得され一時的に安定している。

したがって、以上のようなフマニテートの状態がもはや単に知的ではあり得ないことはもちろんである。素材衝動と形式衝動が意味するように、自ら素材を一つの形式へと定めようとするフマニテートでは美的な諸体験が問題となる (Vgl. N039,S.19)。それはフンボルトが個性から出発しているだけに、素材衝動はシラー以上に深い意味を持っていた (Vgl. N058,S.46)。それ故、これまでに十分に感じ取られるように、彼にとって「高度に展開した個性、……完成された性格は芸術作品とも比較可能である」 (N058,S.47)。つまり、フンボルトでは芸術作品と人格、芸術と教育、そして芸術と歴史とは徹底してアナログカルに考えられており、したがって芸術の特性はことごとく教育や歴史、学問のそれでもある。例えば、「単なる模写ではなく、……精神による理想化」 (N039,S.5) の重視や「理念が……最高度に考えられる形式において」「刻印された直観的形象」 (N039,S.21) である理想を生み出すための想像力 (Phantasie) の必要性——「(フンボルトにとって) 主要な教育手段は想像力である」 (N058,S.67)——、さらには「理念それ自体が到達不可能であり、理念を求める無限の努力において体験されるにすぎない」 (N039,S.4) ことに由来する個体や芸術、歴史、学問の未完成性——違う箇所では次のように言われる、「フマニテートの課題は無限のものとなる。というのも、いかなる人間も自らの自然の限界のために依然として一面的であり、それは天才にしてもそうだからである」 (N039,S.21)——、そして未完成性故に帰結する「絶えざる再構成」 (Vgl. N039,S.6) などが、芸術と同様に教育、歴史、学問の特性となる。

また、個性の形式化に寄与する教育においても、二極に分化されることはきつく拒絶されることになる。「今後とも形而上学そのものが教育の結論を提供することはないであろう。というのも、形而上学には個性化の可能性が欠如しているからである。……とはいえ、将来的に単なる個性が生命力のある教育となることもないであろう。というのも、単なる個性には普遍妥当性が欠如しているからである」 (N039,S.492)。したがって、教育でもフマニテートの状態が求められるわけだが、個性が束の間の調和あるいは融和の仮象としての総体性のために普遍性へと向けて絶えず自らを超越していかざるを得ないという理由から、その状態は永遠の憧れとなる (Vgl. N155, S.400)。後の『生の諸形式』における「生の力動性」や「生の内的リズム」といった見方が既にここに早くも現われている (Vgl. N155, S.396)。

だが、フンボルトが教育、歴史等と芸術を類比的に考えていた以上に、シュブランガーにとって重要であったことが教授資格論文にはいくつもある。それらは一部は旧来の、一部は革新された考え方である。一つは学問へと想像力を導入することを提唱していることである。「私の知っている限りでは哲学は、この想像力がどの程度適用可能であるのか、どの程度我々の外部を描き出すのか、あるいはどの程度我々が我々の限界を越えて他のものへと進むのかを、まだ一度も考究していない」 (N039,S.8) と彼は述べている。哲学の領域で想像力を積極的に用いることを主張したのは、1913年のフッサールの『イデー』であったから (想像変様)、シュブランガーが無自覚ではあっても同時代の動きと歩調を合わせていたという点で興味深い³⁾。もう一つはフンボルトの限界と克服の可能性を示すことであった。つまり、何よりもフマニテ

トの倫理性の問題である。「我々はフンボルトの理論の中に拒むことのできない個人主義的な貴族主義を有している。これは彼の哲学の見紛うことのない限界である」(N039,S.16)。先にフンボルトがルソーからペスタロッチの延長線上に位置づけられたことは触れた。確かに国民教育の基礎段階において、フンボルトは実際にペスタロッチの一般的な初等教育機関を成立させた。「新しい時代の社会的精神が他のどこにも見られないほどに、学校行政の領域で勝利した」(N058,S.9)。しかし、フンボルトはペスタロッチを当初1809年以前では、過小評価していた(Vgl. N058,S.65-68)。シュプランガーはこの原因がフンボルトの自己教育と完全化を求める美的個人主義にあるとしている。この根本傾向のために、フンボルトではペスタロッチに見られるような社会的フマニテート、フマニテートの倫理性が脇へ置かれていた。「社会問題はフンボルトの貴族的な精神ではほとんど見受けられない」(N039,S.494)。それ故、「我々が社会的な倫理を加算して、自己完成の理想を実践的な人間愛の理想によって補完するならば、フマニテートの完全な概念が生じてくる」(N039,S.16)。つまり、フンボルトのフマニテートの理念の美的特性が倫理的特性を併せ持つことを通して時代におけるフマニテートの新たな形態を求めた。「創造的な芸術家に、彼が具体的に描写しようとする理念が思い出されるように、我々の倫理的で生産的な人間形成(Bildung)において我々を導いていくのが理念である」(N039,S.20)。「主観性と客観性の対立をより高次の美的で倫理的な一体性において融合する」(N.039,S.493)。実のところ、ペスタロッチとフンボルトとを融合させようとするこうした定式化は、既に学生時代に素朴な形で表明されていたものであった——「あらゆる社会主義は個人主義を

望む」(N003,S.1)。他方、シュプランガーがフンボルトの限界として指摘する第二のものが、ロマン主義、殊にシェリングの影響を強く受けた時期(1803年以降)にフンボルトに見られるようになった形而上学的傾向である。「我々が諦めるか、少なくとも新たに吟味しなければならない第一のものは、フンボルトの形而上学であろう。……この形而上学それ自体は、彼のフマニテートの理念の客観的な反映でも何でもない」(N039,S.493)。シュプランガーは第1期のフンボルトに引き寄せられている。それは博士論文で個人心理学を重視していたことと明らかに関連があり、彼の歴史理解の手法から必然的に帰結するものであった。第1期にはまだフンボルトは形而上学(普遍妥当性)へと傾斜することはなく、個人心理学に拠っていた。彼によれば、フンボルトの「第2期は……活動する現実存在を求める激しい衝動による自己陶冶理論の排除、形而上学的な全体直観による経験的個人心理学の排除、カントからの徐々の解離、思弁哲学への傾倒」(N039,S.59)を特徴としており、その形而上学的な傾向が「第1期の首尾一貫した個人主義を押しつけている」(N039,S.66)と評されている。それ故、次のことが目論まれる。「形而上学に代えて我々はフマニテートの精神を、精神が可能な最も広く最も客観的な状態として、世界理解と人間理解の非常に生き生きとした頂点として提示してみたい」(N039,S.29)。教授資格論文におけるシュプランガーは、フンボルトが主張する歴史の再構成——これはシラーの影響を受けたものである(Vgl. N033, S.545)——を、まさにフンボルト自身へと適用し、フマニテートの新たな改造を目指していた——教育(Bildung)は内的改造作用(Umbildung/Umformung)であった。

とはいえ、シュプランガーはフンボルトの形

而上学に対して先に示した「諦念と再吟味」のどちらの道を選んだのかという問題が残っている。教授資格論文や小フンボルト論では、フンボルトが心理学的傾向から形而上学的傾向へと移行したことが触れられているにすぎない (Vgl. N058, S.59)。だが、フンボルトのアカデミー講演とシェリング哲学とを比較した1908年の論文 (N033) にまで遡れば、後々のシュプランガーをも規定し続ける重要な見解を垣間見ることができる。確かにフンボルトの形而上学は疑問視されていた。しかし、彼はそこでこう述べている、「常に必要なのは理念の学問、論理的な形式に墮することにももちろん用心しなければならない哲学である。……形而上学において初めて、学問は完結する。……現代は意識されざる形而上学から出発してはならないのだろうか。……現代は普遍性、思考力、美的宗教的深みを失っていないかもしれないのである！」 (N033, S.563)。もちろん、学問が完結されることを彼はいわば信仰していたが、その実現不可能性も知っていた。それ故、彼には中間形式である芸術が節度を与えるもの、中庸として有意義であった。しかし、中庸が存在するためには、その間を生み出す両極、つまり個性 (現実) と普遍性 (理想・形而上学的なもの) が必然的であった。シュプランガーは決して形而上学そのものを否定しなかった⁴⁾。それを諦めるのではなく、再検討することが彼の期待するところでもあった。

以上、教授資格論文は、シュプランガーが後年敢えて告白する必要もなかったほどに、大学学習以来の彼の一貫した学的成長の果実であった。初期シュプランガーではフマニテートの美的特性と倫理的特性という同じモチーフが、その有り様を変えて幻想交響曲の循環形式のように繰り返されている。シュプランガーが博士

論文の「歴史学の基礎」の上に、その方法をフンボルトに適用したという意味において、教授資格論文は明らかに博士論文の発展的形態である。それと同時に、実証主義や歴史主義的相対主義といった時代の学的問題や教育理想の問題を、解釈され直されたと言ってもよいフンボルトのフマニテートで解決しようとしている。教授資格論文はシュプランガー自身がかつて述べたように、単なる歴史報告ではなく、明らかに現実へと接近するために書かれたものでもあった。このような構想は、本稿が引用する中でも最も早い1904年7月29日の書簡に表現されている——「哲学の社会的機能が明らかにされねばなりません」 (GS7, S.10)。これは、彼が早い段階から教育 (学) に強く引かれていたこととも関係しているが、思想と現実に関与しようとする青年らしい貪欲さを物語るものであろう。それと同時に、教授資格論文はシュプランガー自身の人格と学問的理想との形式化も意味していた。それは彼自身の人格の学問的表現であった。次の一文は青年シュプランガーであるが故に記すことができたものであろう、「出発点と目標点は徹底して主観的なものであり、本来の研究なら、中間段階が厳密な客観性を求めて努力するものなのである」 (N039, S.34)。フマニテートの理念に依拠すれば、彼にとってこうした価値判断は十分に可能であるように思われていた。こうした意味において教授資格論文は彼の「青年時代の記念碑」 (1908年10月28日のケーテ・ハートリヒ宛ての書簡から、SpH, S.108) であった。

結びにかえて

証拠立てが避けられないために引用が増えたが、シュプランガーがフンボルトを教授資格論

文の対象として選んだことに、彼が当時、確信を持っていたことは疑いがない。フンボルトのフマニテートの思想がその芸術的傾向から教育理想を作り出し得るものであり、しかもフマニテートそれ自体の中に再構成の可能性を有しているために、つまり時代精神においてその形態を変化させるために、彼の考えを美的社会的フマニテートにまで改造すること——それ故にシュプランガーはフンボルトを批判しなければならなかった——によって、1880年以降の学問上、社会上の諸問題の解決に有効であると思われたこと、またフンボルトがフマニテートの思想家の中でも、シュプランガーの主たる関心事でもある理論と実践の双方に最も寄与したと同時に、当時の諸潮流の交叉点に位置していた点で彼にとってとりわけ重要な人物と映ったこと、そして何よりもシュプランガー自身の思想傾向がフンボルトのそれと共鳴し、教育(学)や彼自身の自己形成にも意義深いものであったこと、これらが彼が研究対象としてフンボルトを選んだ内的要因であった。彼の教授資格論文は彼がフンボルトに見たように、教育や歴史、芸術、学問、自己自身の人格というシュプランガーの複数の関心が一つに集まるところで生まれた。彼の望まぬ言葉で言えば、フンボルトは彼の実存的契機であった。彼はこの作業を通じて彼自身となったと言えるだろう¹⁾。もちろん、それは完結する自己同一性の獲得ではなく、むしろそれを求める絶え間のない努力であった。

ところで、シュプランガーが教授資格論文において「フンボルトの学校改革の人文主義的な基礎づけが今でもなお我々にとって妥当性を有しているという問題」に取り組み、その後数十年に渡って主要なテーマとなる「新しい人文主義の可能性」を時代に投げかけたとヴェルナー・イエーガーは述べている²⁾。そして、この2人

が1922年にベルリン大学で再会したとき、「フンボルト的な思想を、非常に複雑化して混乱した現代状況へと移し入れようとする」³⁾シュプランガーの教育政策を、彼は強力に援護しようとしている。シュプランガーはヴァイマル共和国体制下の状況を、プロイセンの崩壊直後のフンボルトの活動と重ねていたとも思われる。したがって、教授資格論文では学問における思想と現実の総合が、ベルリン大学就任時では実践におけるそれらの総合が目論まれていた。1928年、つまりシュプランガーが精神的支柱となった教育アカデミーの開設後ほどなくして、教授資格論文が再版されたのも、偶然ではなかったであろう。

しかし他方で、1910年以後シュプランガーがフンボルトを直接に取り扱うことはあまりなかった。ライプツィヒ大学教授時代に、結局は未完に終わった「近代における政治と教育の連関」と題した一連の諸論文の中で「プロイセンにおけるフンボルト下の国民教育制度の基礎づけ」(N092)を書き、またフンボルト没後100年(1935年)に際して講演(N381)も行っているものの、いずれも非常に短いものである。とはいえ、第2次大戦前のこの2つの文章は、特にかつてのフンボルト論とは趣きを異にしているとしても、ドイツ国民の形成に対するフンボルトの寄与を中心に扱っている。その場合でも個性、普遍性、総体性のモメントから考察されている点ではかつての延長線上にあるからである。例えば、「フンボルトは見えざるものを探し求めています。彼にとって2つの潜在力とは神と国民でした……。彼は神的なもの、永遠のものと神的なものの時間的な器、つまり彼の国民との間に立っていました」(N381, S.389)。ここでは国民を個性、神を普遍性、フンボルト自身を総体性として対応させている。シュプラ

ンガーはフンボルトを世界市民的な傾向とドイツ人としての国民性が形式化した人物として描き出している。とはいえ、表現以外に目新しいものはないように思われる⁴⁾。紙面の関係上、さしあたりここで筆を置くより他あるまい。

【 註 】

はじめに

1) 様々な理由から書くことを長らく躊躇していた本稿で引用するシュプラランガーの第1次文献については、テオドル・ノイの『シュプラランガー文献目録』(Neu, Theodor [bearbeitet]: Bibliographie Eduard Spranger. Tübingen, Max Niemeyer. 1958) に従い、以下のようにその文献番号で示すこととする。また、文献番号のないものについては暫定的に以下のような略号を用いて示す。

Literatur EDUARD SPRANGERS.

N003: Humanität. In: Ethische Kultur. Jahrgang 12. 1904. S.1-3.

N004: Die Phantasie. In: Die Propyläen. Jahrgang 1. 1904. S.607-609.

N006: Die Grundlagen der Geschichtswissenschaft. Eine erkenntnistheoretisch-psychologische Untersuchung. Berlin, Reuther & Reichart. 1905.

N033: Wilhelm von Humboldts Rede "Über die Aufgabe des Geschichtsschreibers" und die Schellingsche Philosophie. In: Historische Zeitschrift. Band 100. 1908. S.541-563.

N039: Wilhelm von Humboldt und die Humanitätsidee. 1.Aufl., Berlin, Reuther & Reichard. 1909.

N045: Rez.: Wilhelm und Caroline von Humboldt in ihren Briefen. In: Historische Zeitschrift. Band 103. S.352-355.

N054: Rez: Spranger, Eduard: Wilhelm von Humboldt und die Humanitätsidee. (Selbstanzeige.) In: Kantstudien. Band 14. 1909. S.134-135.

N058: Wilhelm von Humboldt und die Reform des Bildungswesens. 1.Aufl., Berlin, Reuther & Reichard. 1910.

N060: Hrsg., Vorw., Einl.: Fichte, Schleiermacher, Steffens über das Wesen der Universität. Mit e. Einl. hrsg. v. Eduard Spranger, Leipzig, Dürr. 1910. S.VII-XL (Einleitung).

N092[teils]: Der Zusammenhang von Politik und Pädagogik in der Neuzeit. In: Die Deutsche Schule. Jahrgang 18. 1914. S.424-430.

N155: Lebensformen. Geisteswissenschaftliche Psychologie und Ethik der Persönlichkeit. 2. völlig neu bearb. u. erw. Aufl., Halle, Max Niemeyer, 1921.

N381: Wilhelm von Humboldt. In: Die Erziehung. Jahrgang 10. 1935. S.385-391.

KSd: Kurze Selbstdarstellung [1961] . In: Bähr, H. Walter/ Wenke, Hans[hrsg.]: Eduard Spranger. Sein Werk und sein Leben. Heidelberg, Quelle & Meyer, 1964, S.13-21.

GS7: Bähr, Hans Walter [hrsg.]: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Band 7, Briefe 1901-1963. Tübingen, Max Niemeyer. 1978.

MSt: Spranger, Eduard: Meine Studienjahre 1900 bis 1909. In: Meyer-Willner, Gerhard[hrsg.]: Eduard Spranger. Aspekte seines Werkes aus heutiger Sicht. Bad Heilbrunn/OBB., Julius Klinkhardt. 2001. S.196-231.

SpH: Sacher, Werner/ Martinsen, Sylvia [hrsg.]: Eduard Spranger und Käthe Hadlich. Eine Auswahl aus den Briefen der Jahre 1903-1963. Bad Heilbrunn/OBB., Julius Klinkhardt, 2002.

なお、本稿に係る近年の国内での先行研究には、山崎英則の「シュプラランガーのフンボルト論」(『広島女子大学生生活科学部紀要』, 2, 1996年), 同「フンボルトの歴史哲学——シュプラランガーの歴史哲学を中心に」(『中国四国教育学会教育学研究紀要』第42巻, 第1部, 1996年), 江島正子「フンボルト論」(村田昇編『シュプラランガーと現代の教育』, 玉川大学出版部, 1995年, 226-245頁) などがある。最初のもは本稿と同様に、教授資格論文の第1部と結論を用いて、シュプラランガーのフンボルト観をまとめたものであり、二番目のものは主にシュプラランガーの1908年論文(N033)に依拠して書かれたものであるが、それらはシュプラランガーのフンボルト理解を教示する上では有意義である一方で、本稿独自の目的を満足させるものではない。江島の論文は、1916年以後にシュプラランガーがフンボルトから離れていった経過と彼のフンボルト批判に触れているものの、やはり青年時代にフンボルトへと彼が接近していった内的経緯についての言及はない。

【 1 】

1) シュプラランガーは1945年に「(教授資格論文の) 計画が個々にどのように実を結んでいったかを、私は思い出すことができない」(MSt,S.219, 補足は引用者) と回想している。

- 2) 1899年にシュブランガーの家族はベルリン中心部を離れており、次第に財産は底をつき、借金生活となっている (Vgl. GS7,S.65; MSt,S.226, 229)。
- 3) ベルリンに対する彼の生涯変わらぬ肯定感については、拙論「若きシュブランガー () ——1900年以前のシュブランガーに関する歴史的比較考察」(『慶應義塾大学社会学研究科紀要』第40号, 2000年)を参照のこと。
- 4) ライツマンは後に自らが所有するプリンクマン宛てのフンボルトの書簡の使用をシュブランガーに許可することになる (Vgl. GS7,S.27)。
- 5) これは教授資格論文が公刊された頃で計7巻であり、続く後々の巻にはやがてシュブランガーが発見し小フンボルト論で取り扱われた2つの「学校計画」に関する文書も収められることになる。
- 6) G・シュレズィーア (1843/45年), R・ハイム (1856年), B・ゲーブハルト (1896/98年) のものをシュブランガーは教授資格論文や小フンボルト論で使用している。
- 7) これについては拙論「初等教育に関する若きシュブランガーとパウルゼン」(慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要第53号, 2001年), 「大学教育改革を巡る歴史と教訓」(中井, 宇田, 片山, 山元『地域に生きる大学』[和泉書院, 2001年]所収)を参照のこと。フンボルトに関するパウルゼンについては別の機会に譲りたいが、彼もまたフンボルトについていくつかの興味深い言及をしている。例えば、主著『教養教育の歴史』や1902年の『ドイツの大学と大学学習』では、フンボルトに対する一定の評価が見られる。この2つはシュブランガーが学生時代に読んでいたものであり、前者は教授資格論文の重要な参考文献としても挙げられている。
- 8) これについては前掲の拙論「若きシュブランガー ()」を参照のこと。

【 2 】

- 1) なお、この小論で注意しておかねばならないのは、フマニテートが多様な形態において自らを表すと彼が述べていることである (Vgl. N003,S.2)。また、彼はここで芸術作品の一回性 (個性) を認めている。

【 3 】

- 1) 教授資格論文ではこれが次のようにまとめられている。すなわち、「十分に明らかになった資料から……フンボルトが機会あるごとに自らの『理論』ないしは『体系』と呼んでいた哲学的な全体的な考え方を再構成すること」(N039,S.39)。
- 2) シュブランガーは「思想の交叉点にいるフンボルト」という印象を、フンボルトが行ったゲーテの特性描写の中にも見ている。「『ヘルマンとドロテア』に関する美的試論におけるゲーテの特性描写において、フンボルトがこの彼の自己形成の時期に寄り合わせたあらゆる系が交わった。つまり、ギリシャ研究、カント哲学、芸術やギリシャ人の把握において、F・シュレーゲルの刺激が付け加わったシラーと共通して研究された美学、歴史哲学的思想、そして——全体の頂点として——フマニテートの観点のもとでのあらゆる人間的なものの把握、こうしたものが交わっている」(N039,S.57)。
- 3) パレチェクは「19世紀におけるドイツの大学にフンボルト・モデルは拡大したのか」という挑発的な論文 (Paletchek, Sylvia: Verbreitete sich ein „Humboldt’sches Modell“ an den deutschen Universität im 19. Jahrhundert? In: Schwinges, Rainer Christoph [hrsg.]: Humboldt International. Der Export des deutschen Universitätsmodells im 19. und 20. Jahrhundert. Basel, Schwabe, 2001. S.75-104) において、19世紀がフンボルト・モデルを知らず、したがってベルリン大学はドイツの他の大学にとっての雛型とはならなかったこと (Paletchek, ebenda. S.77)、確かにそれまで医学部や哲学部に分割されていた自然科学を哲学部において一本化したこと、私講師を組織化した点などにベルリン大学の新しさがあり、模倣されたが (Vgl. Paletchek, ebenda. S.84-85, S.91)、それらは「ベルリン大学創設がラディカルな新しい構想を追及したからではなく、むしろ既存のドイツの大学の近代化された形態」、例えばゼミナールや研究所、実験室、大学病院の組織化などの多くを「引き継いだ」(Paletchek, ebenda. S.87)のであり、必ずしも「先駆的役割」(Paletchek, ebenda. S.89)ではなかったこと——私講師制度でさえ、ベルリン大学が最初に導入した大学ではなかった (Vgl. Paletchek, ebenda. S.91) ——等々を実証的に証明しようとしている。彼女によれば、ベルリン大学が大学の頂点としての地位を手に入れたのは、ベルリン大学と「20世紀の初頭以来、数多くのカイザー・ヴィルヘルム研究所との結合が、学問生産を挺入れし、……大学文化を創造した」(Paletchek, ebenda. S.92) からであった。それ故、研究と教育の自由、孤独と自由といったフンボルト理念、大学の理念は19世紀には存在せず、20世紀初頭が、特に「大々的に催された1910年のベルリン大学創設100年祭」が創作した神話であったとしている (Paletchek, ebenda. S.100) ——本稿でも既に見たように、フンボルトの文章が広く知られるようになったのはその時期である。そして、その神話の発明者がシュブランガーであると、パレチェクは断定している。「シュブランガーはベルリン大学の輝かしい発展を、ある原理、つまり『近代の国家制度の連関で必然的に生じてくるのが可能となった組織形式における学問の理念』が、その大学の根本にあったことを説明した。……ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの偉大な行いが、有機的な統一に

において結びつけられた自由な学問と国家の噛み合いであるとされる。ベルリン大学創設は、シュプランガーにとって天才的な創造の作品であり、雑型であり、「持続的に示される作用の生き生きとした力」である（Paletchek, ebenda. S.101）。この「フンボルトの発見」を試みたと考えているのが、シュプランガーの大学論序説である——ここで直前の引用したパレチェクがその大学論序説から引き出した頁は S.VII と S.XLI である。その際、フンボルト的な大学の理念が構成された背景には、1880年ごろから自然科学と技術の躍進と経済市民層の台頭が精神科学にとって脅威となっており、それに対抗して精神科学の地位を復権しようとする要求が高まり、「エリートの自己理解」（Paletchek, ebenda. S.102）、つまり教養市民層のエリート意識、殊に大学人の「エリート中のエリート」という意識を自己防衛しようとするところから、フンボルトが見出されてきたとされる（Vgl. Paletchek, ebenda. S.102）。また、このようなパレチェクの見解に従いつつ、潮木守一はフンボルト神話の創作者として、シュプランガーではなく、ハルナックを挙げている（潮木守一『フンボルト理念の終焉？ / 現代大学の新次元』[東信堂, 2008年], 例えば200頁以下を参照）。確かに、教養市民層の危機意識からフンボルトが引き合いに出されてきたことは、おそらく間違いないであろう。そして、「遅れてきた教養市民層」の一人として社会的上昇を果たしたシュプランガーが同じような危機意識を持っており、自らの地位を守るために、フンボルトを研究対象としたことも、本稿本文に組み入れるべきほど重要な根拠と考えられる。しかし、フンボルト神話をシュプランガー一人が、あるいはハルナック一人が作り上げたという議論は、かなり強引なものと言わざるを得ない。フンボルト神話が事実であるとしても、それは特定の個人ではなく、むしろ時代状況が、シュプランガーもハルナックもマックス・レンツも、さらにはディルタイやパウルゼンも、さらに遡ればドロイゼンやドゥ・ボア＝レーモンも関与したものであったと考えるべきであろう。ドゥ・ボア＝レーモンが伝えるように、ベルリン大学内にアレクサンダーとヴィルヘルムのフンボルト兄弟の像が建てられたのは、1883年3月28日であり、それは少なくとも本稿には象徴的である。その年に既に次のように語られている。「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトはベルリンをドイツの精神的な首都に高めたのです。いつの時代にもベルリン大学はほとんどあらゆる方向で学問を完全に代表していました」（du Bois-Reymond, Emil: Die Humboldt-Denkmäler. In: Idee und Wirklichkeit einer Universität. Dokumente zu Geschichte der Friedrich-Wilhelm-Universität zu Berlin. Berlin, Walter de Gruyter, 1969, S.402-412. S.407.）。フンボルト復活は既にドゥ・ボア＝レーモンのこの総長就任講演（1883年8月3日）においても始まっていた。それはシュプランガー誕生後僅かしてのことであった。

【 4 】

- 1) シュプランガーは次のようにも述べている、「他者、他の国民、他の時代の理解において拡大することがエネルギーギッシュなフンボルトの力強い個性を意識させること、一つの極は他の極なしには何も意味しないことが、最も深い現実性であった」（N039,S.62）。この一文は明らかに、先に示した博士論文におけるドロイゼン評価と結びついている。シュプランガーはフンボルトに歴史や人格の理解についての方法そのものを見ていた。
- 2) N039,S.4を参照のこと。
- 3) 当時、シュプランガーはおそらくフッサールを十分に知らなかったと思われる。仮に彼が知っていたとしても、『ロゴス』誌におけるフッサールのディルタイ批判くらいであろう。シュプランガーがフッサールと書簡を交わすのは、1918年以降であるが、それも頻繁ではなかった。なお、1911年にシュプランガーは「想像力と世界観」に関する文章も書いているが、結局のところフッサールのように想像力を哲学的に基礎づけることはしなかったようである。
- 4) シュプランガーは最晩年でも、ディルタイの体験の哲学に惹かれながらも、彼の「歴史主義に対する静かな抵抗」（KSd,S.14）を学生時代に行っていたと述べている。また、これはディルタイの教育学論文に対する批判とも関連している。「ディルタイの教育学の普遍妥当性に関して書かれた文章は、私にとって……形而上学的な深みにおいて十分ではなかった」（MSt,S.208）。なお、この箇所では当時パウルゼンの『ドイツの大学と大学学習』の意義についても触れられている。

結びにかえて

- 1) シュプランガーがフンボルトの思想の中に、自分自身を投影していたことは間違いがない。個性を放棄することなく、普遍妥当性に至る状態としての総体性は、シュプランガー自身が自らに望んだものであった。その際、彼がフンボルトを見出す契機となったのは、既に小論「フマニテート」で自己喪失を重大視していたように、やはり彼自身、つまり個性であった。教授資格論文でもこのことは、「我々の主要対象となっている『個的理想』という独自の概念」（N039,S.55）として明示されている。この個的理想にはシュプランガー自身がいかんして生きるべきかという問題が含まれているように思われる。フンボルトが彼の実存的契機となっているというのは、この意味においても当てはまる。
- 2) Jaeger, Werner: Im Zeichen eines neuen Humanismus. In: Eduard Spranger. Bildnis eines geistigen Menschen unserer

Zeit. Heidelberg, Quelle & Meyer, 1957, S.24-30. S.25

3) Jaeger, ebenda. S.28.

4) 1935年のフンボルト講演はいわくつきのものである。この講演は1935年5月19日に「ベルリン及びブランデンブルク人文主義ギムナジウム友好協会」で行われた記念講演であったが、それに先立つ4月8日にはベルリン大学でフンボルト没後100年の催しがなされていた。しかし、既にフンボルト研究で十分に知られていたにもかかわらず、そこでの講演をシュプランガーが依頼されることはなかった。彼に代わって講演をしたのは、かつてシュプランガーが政治教育学講座の開設に反対してベルリン大学に辞表を提出した際に、その講座に就くことになったアルフレート・ボイムラーであった。シュプランガーの友好協会における講演はボイムラーを意識したものであった可能性が高い。なお、江島の前掲論文では1935年に『人文主義ギムナジウム』誌にシュプランガーがフンボルト没後100年に寄せて書かれたノイの『シュプランガー文献目録』にはない文章の存在が指摘されており、そこでシュプランガーの次の言葉を引用して、フンボルトからのシュプランガーの距離化を歴然のものとしているが、これは再検討の必要があろう。すなわち、「長い間フンボルトについて研究してきましたが、私は決して人間としてのフンボルトに親しみが感じられなかったことを告白します」(江島, 前掲書, 226頁)という引用である。というのも、シュプランガーが告白したのは、人間(Person)としてのフンボルトだったからである。

(2008年12月3日 受理)